

【書評】

武内善信著 『雑賀一向一揆と紀伊真宗』

新 谷 和 之

紀伊国北部の雑賀は、一向一揆や惣国一揆の研究史上、著名な地域である。本書は、紀伊国における浄土真宗勢力の展開や雑賀の地域的な特性を踏まえ、雑賀一向一揆の実態を解明した研究である。著者の武内善信氏は日本近代史の研究者であるが、真宗寺院の住職をつとめ、和歌山市で長く学芸員として勤務するなかで、紀伊の真宗史や一向一揆に関する実証研究を積み重ねてきた。これらの成果をとりまとめたのが本書である。

本論は三部構成である。九十年代後半からの既発表論文を中心にまとめているが、最新の研究成果を踏まえて少なからず加筆・修正が加えられている。「まえがき―本書の課題と構成」では、室町・戦国期紀州史の概略を示した上で、各部に関わる研究史の課題を提示している。全体を総括したパートはないが、各部の最後に総括的な論考が配置

されている。特に、第三章・第八章が本書の内容を通時代的にまとめたものとなっている。

以下、部ごとに本書の内容を紹介する。個別の疑問点は各部の末尾に記し、全体にわたる成果と課題については最後に触れることにしたい。

第Ⅰ部 戦国・織豊期の紀伊真宗

「第一章 紀伊真宗の開教と展開―蓮如期を中心に―」では、紀伊国における真宗の展開を蓮如期以前から紐解く。従来、紀伊真宗の本格的な開教は蓮如の布教以後とされてきたが、十四世紀には仏光寺の教線がのびていたことが一向専修念仏帳（西円寺蔵）などからうかがえる。寛如期開基とされる寺は、真光寺・性応寺取次の興正寺門徒として既に道場を開いており、明応年間に本願寺から方便法身尊

像を下付された。興正寺末の道場は港湾や河川の流域に分布することから、仏光寺は「海の道」「川の道」に沿って教線をのびたといえる。

文明八年（一四七六）の蓮如の熊野詣は伝説の域を出ないとし、石田晴男氏の説を批判する。文明十八年の蓮如の紀伊下向は、浄光寺了真とその門徒の教化が目的であり、了真は「陸の道」を通じて教線をのびた。清水に二尊像が下付された理由としては、蓮如にとって了賢が紀州で最初の直弟子であったこと、清水が「海の道」と「陸の道」の結節点にあたるのが考えられる。その時期は、方便法身尊像の下付以降に限定する必要はなく、文明十八年から延徳四年（一四九二）の可能性も捨てきれないという。

「補論1 蓮如筆「紀伊国紀行」の検討」では、文明十八年の紀伊下向について蓮如が自ら綴った「紀伊国紀行」の諸本を比較検討し、蓮如が清水を出発したのは十一日であることを明らかにした。

「第二章 真宗教団と被差別民―実如期の紀伊真宗を中心に―」では、実如期における紀伊真宗の展開を論じ、真宗教団と被差別民の關係に再検討を加えた。紀伊国では、本照寺（もと光照寺、摂津富田）の下寺はすべて「部落寺院」であった。狩宿光明寺や井坂蓮乗寺の事例から、永正年間（一五〇四～一一）、紀ノ川中流域に光照寺の教線がのびた

ことがわかる。近世、有田郡以北の「皮田村」に立地する寺院・道場はすべて本照寺末であることから、同種の社会集団へ布教がなされたと判断できる。これに対し、日高郡の西本願寺末「部落寺院」は直末系である。また、「夙村」の真宗寺院・道場はほとんどが興正寺門徒性心寺末であり、仏光寺派を含む旧明光派が被差別民を積極的に教化していたと考えられる。

「補論2 「被差別部落一向一揆起源説」の実証的検討―紀州那賀郡井坂・蓮乗寺文書について―」では、正月廿四日付大田退衆宛宛頭如消息（井坂蓮乗寺蔵）がもとは太田村の玄通寺にあったことを論証し、石尾芳久氏の「被差別部落一向一揆」起源説を否定する。また、木仏下付御札への願主名の追筆から、蓮乗寺はもともと看坊で、自庵になった際に書き換えがなされた結論づけた。

「第三章 雑賀における御坊の成立と変遷」では、御坊移転の意義を歴史的に探る。清水の了賢は、地域教団編成の象徴である親鸞御影を蓮如より下付されたが、この時点で清水はまだ道場であった。了賢は、いわゆる「河内錯乱」「大坂一乱」に関与したために直参の身分をなく奪われたと考えられる。これは、細川政元からの軍事動員への対応をきっかけに、実如を排斥し弟実賢の擁立を画策した勢力を実如が破門した事件である。この事件を機に本遇寺は凋

落し、本遇寺末の道場は下寺の浄光寺に吸収された。

黒江の御坊は、天文四年（一五二四）から「黒江十八人衆」が管理し、自庵の道場坊主が交替で運営することになった。だが翌年、「黒江与力衆」がその不当性を訴え、結局惣中に管理運営権が移る。本願寺の大坂移転により後背地としての紀州の重要性が高まり、紀州の門徒はしばしば上山を要請された。その際、興正寺が重要な役割を果たした。紀伊国内の道場の約半数は興正寺末であり、黒江御坊を直末だけで管理させるわけにはいかなかったのである。さらに、本願寺は畠山植長との連携を強めるために、地域の紛争調停にあたった。

その後、雑賀の御坊は御坊山へ移転する。御坊山は和歌川河口の湊を押さえる要害の地にあり、本願寺支援に便利であった。また、御坊山のある雑賀本郷は真宗の勢力が強かった。

鷺森への御坊の移転は、大坂を中心とする寺内町ネットワークや教団の交通・流通網に紀伊湊を組み入れようとする本願寺の意向に基づいてなされた。天正二年（一五七四）の本堂と御主殿の造営は、本願寺がいざという時に鷺森へ退去することを念頭に置いて行われたと考えられる。近年発掘された堀跡も、この時の整備に伴うものである。鷺森御坊は、「辻本三十六人」の合議制により運営された。

そこには雑賀五組外の寺院も含まれる。一方で、性心寺・真光寺など雑賀に移転した中本寺は、御坊の運営には直接関与しなかった。

「補論3 戦国期の鷺森寺内と宇治」では、鷺森を含む宇治の戦国期段階の空間構造を想定する。鷺森の一带は、御坊成立以前は野原に近い土地であった。御坊は近辺の市場と湊と有機的に結び付いて存立し、寺内町と呼べるほど周囲は町場化されていなかった。戦国期の宇治は、三田市・市場・宇治本村の三村からなり、鷺森寺内創設により四村となった。

以上、第1部を通じて気になったことを三点触れておく。第三章第一節では、清水道場に下付された二尊像が黒江へ移された要因として、「河内錯乱」「大坂一乱」の影響を挙げる。しかし、了賢がこの事件に関与したことを直接示す史料はなく、紀州への影響は推測に頼るところが大きい。著者が述べるように、了賢も本遇寺も、蓮如との関わりが強かった。とすれば、実如段階の教団編成のなかでこの問題を位置づけることで、より蓋然性の高い評価ができるのではない。

第三章第二節で、本願寺は畠山植長との関係を強化するために、この宮社家衆と紀州門徒との相論を調停したとする。だが、ここでは牢人衆の還住が懸案となっており、

本願寺は畠山植長と相談して解決にあたった。その最中に門徒がこの宮に「造意」をかけたため、本願寺は植長を刺激しないよう門徒を戒めている。紀伊国内の問題なので、守護である植長と協力して対処するのは当然であり、著者のような政治史的な文脈で評価するのは困難ではないだろう。

第三章第四節では、御坊山から雑賀へ御坊が移転した理由として、本願寺が紀伊湊の掌握を意図したことを挙げる。確かに紀伊湊は拠点的な港湾であり、紀伊国の交通・流通の要として重要視されたことはうなずける。ただし、鷺森自体は紀伊湊の中心からは一定の距離があり、湊を直接掌握できる位置にはない。また、それまでの御坊と比べても、湊からは離れているように見受けられる。むしろ鷺森は和歌山平野の中央付近にいたり、雑賀の門徒衆を統制する上で都合がよかったのではないか。いずれにせよ、移転の要因については、湊の掌握以外の側面も含めて総合的に検討する必要がある。

第Ⅱ部 雑賀衆と雑賀一向衆

「第四章 雑賀一向衆の実態―「雑賀一向衆列名史料」の検討―」では、雑賀一向衆の構成を示した「雑賀一向衆列名史料」（本願寺蔵）を紹介し、基礎的な検討を加えている。

山市史 第一巻』に掲載された図を批判的に検討し、雑賀五組の境界を地誌や絵図、古地図などをもとに想定した。以上が第Ⅱ部の内容である。分量はそれほど多くないが、本書全体に関わる重要な論点が提示されているので、その評価については最後に述べることにする。

第Ⅲ部 「石山合戦」と雑賀一向一揆

「第六章 天正三年の雑賀年寄衆関係史料」では、天正三年の雑賀年寄衆に関する四点の史料（本願寺蔵）を紹介し、「石山合戦」前半期の雑賀門徒の動向を論じる。起請文の署判者は雑賀一向衆の年寄であり、各本末の道場主であった。これらの史料から、遅くとも天正三年には雑賀門徒衆が組織として「石山合戦」に参加したことがわかる。

一方、元龜四年（一五七三）に三好長治が篠原長房を上桜城に攻めた際には、雑賀衆は長治方として参陣し、長房妻及び松光以下の子を引き取った。本願寺を支援する長房を攻めていることから、雑賀衆は本願寺の意向に頓着せず、自らの「仕事」を優先したといえる。

「第七章 天正六年の雑賀志衆関係史料」では、天正六年に作成された二点の連署起請文（本願寺蔵）を、本願寺の呼びかけに応じた雑賀門徒の志衆が提出したものと評価する。雑賀の門徒衆は、度重なる要求や意義が感じられな

まず据えられている人名・花押を検討し、人名付の道場については開基者の俗名と惣領の花押、地名付の道場については天正期に本人が花押を据えていることを明らかにした。次に地名に関しては、真光寺末の道場は東端から順に記載され、それ以外は鷺森から周縁へ広がるように示され、鷺森から持ち回って署名できるようになっている。これらのことから、一連の史料は天正八年の大坂本願寺の退去に際して、頭如側が講和の受け入れを働きかけたことを示すものと結論づけた。

「第五章 雑賀衆と雑賀一向衆」では、雑賀衆と雑賀一向衆の結合論理の違いを示し、両者を区別する必要性を説く。雑賀衆については、永禄五年（一五六二）の湯河直春起請文（湯河家文書（東京））をもとに、五つの組を基盤に、惣村、惣郷・惣荘単位に一揆を結んだ地縁集団であるとする。これに対して、雑賀一向衆は、道場を単位に、本末関係を軸に地域を横断して組織され、その区域は雑賀衆よりも広域に及ぶ。雑賀では、真宗の割合は戦国期では四分の程度にとどまり、北陸のような真宗地帯ではない。

本願寺関係史料にみえる「雑賀衆」は雑賀一向衆、「国」「惣国」は雑賀一揆をそれぞれ指すとし、雑賀衆と湯河氏による惣国一揆を想定する石田晴男氏の説を批判した。

「補論4 戦国期における雑賀五組の境界」では、『和歌

い要請は容易に受諾しなかった。そこで本願寺は、天正六年半ば頃から志衆や自飯米衆へ呼びかけを行い、志をもった者たちが組ごとに結集した。当時、本願寺の動員命令に従わない者は破門され、往生できないという認識が門徒の間で広まっていたが、紀州門徒はそれに應ぜず、自主的に行動したことがわかる。

「第八章 雑賀衆と「石山合戦」」では、「石山合戦」に対する雑賀の人々の関わり方を段階的に整理する。雑賀一向衆が本願寺への支援を本格化するのには天正期以降であり、それまでは紀伊守護畠山氏の催促に従っていた。畠山秋高が殺害され、足利義昭と信長が反目するに及び、雑賀方は將軍である義昭に従ったのである。さらに、本願寺は天正二年頃にはいざという時の退去先を鷺森に決めていた節があり、本願寺方からの強い働きかけもあって雑賀一向衆は「石山合戦」への参加を積極化させた。天正五年、織田信長の雑賀攻めでは宮郷・中郷・南郷の三組と根来衆の主力は信長方につくが、その後三組内では一向一揆勢がむしろ優勢になる。本願寺からの過剰な要請に対し、雑賀の門徒衆は組織として難色を示すようになり、天正六年半ば頃からは本願寺は「志衆」や「自飯米衆」へ個別に合力を要請している。「石山合戦」終結後には、雑賀一向一揆側の最有力豪族である鈴木孫一や土橋平次が、雑賀一揆内で主導

権を握るまでに成長を遂げた。

「補論5 秀吉の朝鮮侵略における降倭部将沙也可と「雑賀孫市」——鈴木孫一「族のその後」——では、沙也可が加藤清正の配下であることを確認し、雑賀出身の鈴木孫一郎とする俗説を否定する。さらに、鈴木孫一の子と思われる孫三郎が豊臣秀吉の直臣となり、後に水戸藩の重臣となったこと、孫一の弟は地元に残り、紀州徳川家に仕えたことを明らかにした。

第三部で疑問に感じたことを二点記しておく。第八章第四節では、本願寺が「いざという際の退去地を鷺森に決めていた」ことを「雑賀一向衆が「石山合戦」への参加を積極化させた最大の要因」とする。鷺森への移転を構想した本願寺が、雑賀一向衆へ協力を強く働きかけた結果、雑賀一向衆は「石山合戦」での本願寺方の主力になったのだという。しかし、織田信長と足利義昭の反目はこの計画以前のことであり、雑賀方は計画に先立って反信長陣営について可能性はある。だとすれば、本願寺は雑賀一向衆から一定の支持を得た上で、鷺森への移転を計画したとみる余地もある。

第八章の末尾で、鈴木孫一や土橋平次が「石山合戦」の過程で雑賀一揆の主導権を握る立場に成長を遂げたことあるが、その要因については十分に論じられていない。もちろん

こうした一揆像の見直しは、紀伊国における真宗の展開過程や、政治権力と真宗勢力をめぐる実証研究に下支えされている。紀伊国では、本願寺派が本格的に布教を開始する前に仏光寺派が教線をのぼしていたことが本書により明らかになった。同様の現象は他地域でもみることができ、今後、比較検討が可能となるだろう。また、畠山氏・湯河氏などの地域権力が真宗の地域展開に影響を及ぼしていたことは、地域史・権力論の立場からみても興味深い。さらに、雑賀勢が足利義昭との関係で本願寺支援に乗り出したとの指摘（第八章第四節）は、近年の幕府論の成果とも符合し、首肯できる。

研究手法の面では、真宗史研究ならではの目配りの広さと、博物館学芸員としての地域への向き合い方の両方が垣間見える。本書は、中・近世の古文書・古記録はもちろん、近世の地誌や寺院の什物など様々な史資料を駆使し、考古学・建築史学・歴史地理学など隣接諸分野の成果も取り入れ、真宗と地域との関わりを総合的に解明しようとしている。また、補論4のように戦国期の領域区分を地図上に落とす作業は、不確定要素が多く、学術論文では敬遠されがちだが、「わかりやすさ」が常に求められる学芸員にとっては、ビジュアルな情報発信は必須である。このような独特の研究スタイルは、本書の学問的な成果に奥行きをもたら

ん、彼らが「石山合戦」を戦うなかで、一揆の構成員を軍事的に統制し、徐々に力量を高めていったことは間違いない。それに加えて、織田政権の軍事的な介入についても考慮する必要がある。「石山合戦」の鈴木・土橋間の戦闘に際して、織田方は一貫して鈴木を支援している。ここから、織田政権が鈴木を介して雑賀の一揆勢を把握しようとしていたことがうかがえる。当該期の一揆の変容については、有力土豪の成長と政権による挺入れの両面を視野に入れて論じるべきではないか。

本書の成果と課題

本書の最大の成果は、真宗の本末関係に基づく雑賀一向衆と、地縁的共同体である雑賀衆を峻別した点にある。従来、雑賀の一揆は「石山合戦」での活躍ぶりから一向一揆とみなされてきたが、実際には地縁の論理と宗教的なネットワークが交錯する複雑な様相を呈していた。これを踏まえれば、本願寺関係史料で地縁に基づく「国」「惣国」と門徒集団が別個に登場することが理解できる。雑賀において真宗以外の宗派が一定の割合を占めていたことや、「石山合戦」で雑賀の人々が本願寺の意向に頓着せず主体的に行動したことからも、これまでの一向一揆としてのイメージは大きく修正を求められることになるだろう。

らしているといえよう。

次に、疑問に感じた点を述べておく。本書は真宗を核としたネットワークの解明に主眼を置いており、雑賀における地縁的な結合そのものを論じているわけではない。しかし、地縁的な一揆と門徒衆の広がりやを区別してみるなかで、雑賀一揆の動向についても触れており、決して一向衆に限った研究ではない。それならば、これまでの雑賀「惣国」をめぐる研究史のなかで、本研究の成果がどのように位置づけられるのか示すべきではないだろうか。たとえば、川端泰幸氏は、日前宮の神事を媒介とした地域秩序が惣国の基礎にあるとする（『日本中世の地域社会と一揆』法蔵館、二〇〇八年）。だが、著者が明らかにしたように、雑賀の五組はそれぞれ成り立ちが異なり、政治的にも独自の動きをみせた。とすれば、異なる原理でまとまる各組が「惣国」として連帯する契機は何なのか、なお追究する必要がある。雑賀という地域的なまとまりがもつ意味について、著者の見解をうかがいたかった。

この点に関わって、複数の本末関係からなる一向衆が、地縁に基づく雑賀衆とは若干範囲を異にしつつも、雑賀という一定地域内におさまる必然性は何なのか、もう少し踏み込んだ説明がほしかった。列名史料が天正八年の鷺森への本願寺移転を前につくられたのであれば（第四章）、移

転後の本願寺を周辺の真宗勢力が支えるという意味で地域的なまとまりが重要となるのは理解できる。では、そこで「雑賀一向衆」の枠組みは、どこまでさかのぼることができるのか。本願寺関係史料上の「雑賀衆」と同一とみてよいのか。真宗勢力の地域展開において既存の地域秩序が意味をもつならば、雑賀五組の地縁的枠組みが一向衆の伸張に影響を与えた可能性は高いのではないか。こうした影響関係についても、今後議論を進めていく必要性を感じる。

また、惣国一揆と一向一揆の結合論理の違いを指摘し、両者を峻別する本書の研究視角が、従来の一向一揆研究に対してどのようなインパクトを与えることができるのか、言及がほしかった。たとえば、神田千里氏は一向衆を非門徒も含む雑多な集団とするが、『一向一揆と真宗信仰』吉川弘文館、一九九一年）、著者はあくまでも真宗の本末関係を軸とした結合とみる。こうした前提の違いは、一向一揆の成り立ちや地域社会との関わりをめぐって少なからぬ評価の差異を生むことになる。本書の手法は、雑賀にとどまらず、従来の一向一揆像の相対化につながるものと期待される。それだけに、研究史に対する著者の見解が明示されなかったことは残念である。

もちろん、上記の課題は著者のみに帰すべきものではない。本書の成果は、紀伊の真宗史・地域史の研究水準を一

挙に押し上げるとともに、従来の一向一揆・惣国一揆の研究に多くの示唆を与えるものといえる。今後は、この成果を踏まえて、雑賀の地域構造の解明をさらに進めるとともに、中世地域史における位置づけを論じることが求められよう。なお、浅学ゆえの誤読や認識不足等があれば、ご寛恕いただきたい。

（二〇一八年一〇月刊、法蔵館、三八六頁、九〇〇〇円＋税）